

『紫式部集』伝本の比較

―構成にみられる相違―

曾和 由記子

一 はじめに

『紫式部集』の伝本は、定家本系・古本系・別本系の三系統に大別されている。その中で定家本系の最善本である実践女子大学本（以後実践本と略。）と、古本系の最善本である陽明文庫本（以後陽明本と略。）とが主に比較され論じられてきた。

配列の方法については、まず岡一男氏の『源氏物語の基礎的研究』^①によって年代的配列が指摘されて以来、大方この見方であった。その後、諸氏により年代的配列ではなく、さらに積極的に配列意図を解釈しようとする試みがなされてきた^②。

その中で、近年、家集は編纂物であり編纂時の取捨選択と配列が家集の意図に繋がるという指摘が廣田収氏や徳原茂実氏から出されている^③。史実と照らし合わせ、陽明本よりも整合性のある実践本が最も信頼できる伝本であると了解されている現在、両氏の指摘は大きい。

徳原氏は家集の構成が史実に基づいた時系列を目指していることを前提として、紫式部本人の編纂ならばおおよそありえない配列の乱れがあることから実践本自選説を疑問視している。本家集の構成は、前半が主に少女時代から夫宣孝の死までの歌、後半に宮

仕え時期の歌が並ぶ。その中で、本来なら前半に入るべき越前から都への帰京歌や、宣孝への閨怨歌が後半に配列されている問題がある。

このように、本家集には前半からすでに配列の乱れがあるが、家集が史実に基づいた時系列の配列を目指していたかどうか自体にも問題があるため、それが自選を否定する根拠となるかは難しいと思われる。

廣田氏は両本の末尾歌が異なることから、それぞれは異なる編纂意図によって配列されていると論じ、両本の独自性に注目している。両本の独自性について、筆者は別稿で本文の異同を詳細に検討することで両本が異なる性格を持つことを論じた（『国文目白』第四十八号掲載）。結果だけを簡潔に述べると、陽明本は不自然さの残る古態を残した本文で、主観的な表現が多く作者主体の位置を重視している傾向があった。実践本は極めて整合性のある本文で、客観的な表現が多く特に貴人に対する箇所では、自己の視点ではなく貴人の視点を中心とした表現であった。

本稿では別稿で論じた表現の相違による両本の性格の違いに加えるものとして、両本の現行の配列を尊重しながら比較し、相違を明らかにすることで、両本の配列意図と陽明本の重要性について述べてゆきたい。

二 配列の異同

実践本と陽明本の配列表を本稿の最後に載せた。それを一覧すると、両本の配列の異同は次に列挙するとおりである。なお、配列表と同様に陽明本の歌番号は漢数字で示し、実践本の歌番号は算用数字で示す。

一番歌から五一番歌までは、配列・本文ともにほぼ一致している。ここから両本は基本的にある段階の本文を共有しているといふことができる。

五一(51)番「たが里の」のあとに陽明本では欠歌があり、そのあと五二番に実践本にはない「をりからを」の歌を有している。また陽明本では五七番「うきこと」の次は欠歌となっているが、実践本ではそこに「つれぐ」との歌があり、贈答となっている。六一(68)番「影見ても」の後に、実践本では69番「ひとりあて」の歌がある。

両本ともに六二(78)番歌「忘るるは」から次の「たが里も」の間に欠歌、または空白とあり、破損の記憶を共有している。

陽明本の末尾歌「いづくとも」が実践本にはない。

また、実践本は、陽明本の「日記哥」を家集に取り込んだ配列となっており、いくつかの部分で歌の配列が組み替わっている。それらの部分をA・B・C群とした。

A群では、陽明本で九一番から九四番と後方に位置している初出仕時期を表す歌群を、実践本では、明らかに初出仕時期の歌と確認できる歌群(56番から64番)の最初に置いている。

とで両本の配列意図を探りたい。

三 宮仕え関係歌の異同 — A群 —

A群の問題は、「身のうさは」「とちたりし」「み山辺の」「み吉野は」の四首の位置である。陽明本ではこれら四首は九一番から九四番と後方に位置し、五六番「こゝろだに」と五七番「うきこと」が連続している。それに対し実践本は、この二首の間に問題の四首を有しているのである。この異同については、現在、実践本が本来的であるとする説が有力である。底本に陽明本をとる注釈書もこの箇所に関しては実践本の配列に従っている⁽⁴⁾。実践本の配列の方が家集後半、宣孝死後の初出仕を示す位置にあり、前後の歌との繋がりも良いのである。実践本の本文を見てみよう。

はじめてうちわたりをみるにも、ものゝあは
れなれば

56 身のうさはこゝろのうちにしたひきていまこゝへぞおもひみだるゝ
まだいとうあゝしきさまにて、ふるさとか

へりてのち、ほのかにかたらひける人に

57 とちたりしいはまのこほりうちとけばをだえの水もかけみえじやは
かへし

58 み山べのはなふきまがふたに風にむすびし水もとけざらめやは

B群では、実践本は少少將の君の死の歌群が抜けている。その代わりに68番「かげみても」の前に法華三十講の夜で始まる日記哥一から三を置き、後ろに日記哥四・五を置く。そのようにすることで法華三十講歌群を成している。さらに73番「まきの戸も」と76番「をみなへし」の間に日記哥一五・一六があり、B群全体で宮仕え関係歌群を成している。陽明本では六一番歌「影見ても」の後ろに配列してある「忘るるは」「たが里も」の二首が、実践本では、帰京歌歌群のはじめである81番「ましもなほ」の前に置かれている。

C群において、実践本では113番「よこめをも」と119番「なにばかり」の間に日記哥六と日記哥八から一一が配列してある。ここでも、実践本はC群全体で宮仕え関係の歌群を成している。

以上のように列挙してみると、陽明本と実践本の配列の異同には次のような特徴を捉えることができる。

一つは、両本間の配列の異同は、主に宮仕え関係歌にみられることである。特に、実践本にあつて陽明文庫本にない歌群は、陽明本の日記哥の歌群におおよそ一致し、配列もよく重なっている。逆に、宮仕え関係歌と末尾歌以外の配列は両本ほぼ一致している。二つめに、A・B・C群において、実践本では宮仕え関係歌を時系列や類聚性を重視して配列している。また、陽明本と実践本では末尾歌が異なる。

このように、陽明本と実践本の配列の異同は、特に後半のA・B・C群の三箇所集中し、宮仕え関係歌にみられることが明らかにになった。さらに末尾歌が違うということは、両本の編纂意図が相違することを示している。これらの異同の内容を検討するこ

正月十日のほどに、「はるのうたゝてまつれ」

とありければ、まだいでたちもせぬかくれがに

59 みよしのは春のけしきにかすめどもむすばれたるゆきのした草

やよひばかりに、宮のべんのおもと、「いつか

まいりたまふ」などかきて

60 うきことをおもひみだれてあをやぎのいとひさしくもなりにけるかな

返し

61 つれぐとながめふる日はあをやぎのいとゞうき世にみだれてぞふる

かばかり思そしぬべき身を、「いといたうも上

ずめくかな」といひける人をきゝて

62 わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をやおもひすつべき

くすだまをこすとして

63 しのみつるねぞあらはるゝあやめぐさいはぬにくちてやみぬべければ

返し

64 けふはかくひきけるものをあやめぐさわがみかくれにぬれわたりつる

見てのとおり56番の詞書で初出仕時であることが明らかであり、その後宮仕えに馴染めず里居がちな式部と同僚女房との贈答が並ぶ。59番詞書「正月十日」、60番「やよひばかり」、63番「くすだま(五月)」と時間の推移も整って全体で宮仕え初期の歌群を形成する。

確かに、実践本の配列は何の矛盾もなく整っているといえよう。しかし、実践本の配列が本来的であるかどうかという判断は難しい。というのは、南波氏の『紫式部集の研究 伝本校異編』⁽⁵⁾によつて整理分類された定家本系二十八本を見ると、このA群の配

列が実践本と同様であるのは瑞光本のみなのである。瑞光本は実践本を写したとみられる伝本である。実践本・瑞光本を除くすべての定家本系伝本は「身のうさは」のみを有し、続く「とどたりし」「み山辺の」「み吉野は」の三首を欠いている。本稿は家集の原形を目指すことが目的では無いが、このような問題があることは指摘しておく。

次に陽明本の配列を検討したい。現行の配列では本当に読むことはできないのだろうか。陽明本の配列は、配列表で分かるとおり宣孝死後の心身の葛藤を読む五五番「数ならぬ」・五六番「心だに」の後、すぐに五七（60）番「うきことを」が並び、実践本にはある61番「つれぐ」との返歌を欠いて、五八（62）番「わりなしや」・五九（63）番「しのびつる」・六〇（64）番「今日ばかり」の三首が続く。五五・五六番の歌は次のとおりである。

身を思はずなりと嘆くことの、やうやうな

のめに、ひたぶるのさまなるを思ひける

五五 数ならぬ心に身をばまかせねど身にしがふは心なりけり

五六 心だにいかなる身にかかならむ思ひ知れども思ひ知られず

陽明本の配列では確かに初出仕を明確に示すことは無い。そうであっても、詞書から紫式部の生活環境が宮中に変わったこと、新たな環境では上手くいっていないことは読み取れる。五五・五六番の身と心の矛盾に続いて慣れない宮仕えの歌という並びも不自然ではない。

四 宮仕え関係歌の異同 ― B群 ―

B群の配列を比較すると、陽明本では小少将の君の死の歌群を中心に孤独な心情を強く表す配列となっている。実践本は小少将の君の死の歌群が抜け、A群から引き続いて宮仕え関係歌を中心とした配列になっている。

また、B群には六一（68）番歌「影見ても」が陽明本では独詠歌として、実践本では小少将の君の返歌「ひとりゐて」を載せて贈答歌となっている問題がある。これについては、どちらが本来的であるのかが様々に論じられてきた。

原田敦子氏は家集原形の段階で「影見ても」を残して大きな損傷を受けたため、実践本では前後に七首を補い、陽明本では独詠歌として捉え詞書も改めたとしている⁶⁰。山本淳子氏は、陽明本の一首のみ独詠という記載は、作者によって意図的になされたものであるとする⁶¹。南波氏は陽明本において作者がはじめから意図的に「影見ても」を贈答歌から独詠歌に改変していたとすれば、答歌であった「ひとりゐて」の歌が、後人による「日記哥」に法華三十講関係歌の一つとして補われたはずであるが、「日記哥」の中に該当歌はないことから「後人が『日記歌』を巻末に収載する段階では、本文中にあったのが、損傷か錯簡かその他何らかの事情で、後に脱落したものと思われる」とする⁶²。

このような複雑な問題があるが、先にも述べたように、本稿は両本を比較して原形の配列を復元することが目的ではなく、両本のそれぞれの特徴を捉えることが目的であるため、現行の配列に

では、家集後方に置かれた問題の四首はどうであろうか。陽明本では初出仕の四首は九一番から九四番である。その前に並ぶのは弘徽殿の右京という女房へのからかいの歌である。

侍従の宰相の五節の局、宮の御前いと近きに、

弘徽殿の右京が、一夜しるきさまにてありし

ことなど、人々言ひ出でて、日陰やる。さし

まぎらはすべき扇などそへて

九〇 おほかりし豊の宮人さしわけてしるき日かげをあはれとぞ見し

これは『紫式部日記』にさらに詳しい記事がある。以前は弘徽殿女御の女房として宮中を立ち馴れていた右京が、今は五節の舞姫の介添え役に身を落としたことを、彰子方の女房達があえて趣向を凝らした歌を送ってからかったのである。

この右京をからかった歌の後に、初出仕の頃の歌を続けるのは回想表現と読めよう。女房同士の対立などを含め宮仕えに慣れきった今の自分も、初出仕の頃はまだ物馴れずに里居がちであったことを回想し、嫉妬や噂が絶えない宮仕えに馴染んでしまった我が身を思うのである。この後に中将や少将という同僚女房とのやり取りや行事に関した歌が続き、宮仕え関係歌で歌群が形成されていることから陽明本の配列のままでも問題はないといえよう。

従って解釈していききたい。

まず、陽明本の配列から見てみよう。陽明本では、六一番「影見ても」を独詠歌とし、孤独な心情を強く表す六二番「忘れるるは」六三番「たが里も」の二首の後に、六四番から六六番まで小少将の死の歌群が置かれ、六七・六八番に生前の小少将の君との贈答、六九・七〇番に道長との贈答が並ぶ。それぞれを詳しくみていく。

土御門院にて、遣水の上なる渡殿の簀の子にゐて、

高欄におしかかりて見るに

六一 影見てもうき我が涙落ちそひてかごとがましき滝の音かな

久しくおとづれぬ人を思ひ出でたるをり

六二 忘るるはうき世のつねと思ふにも見をやるかたのなきぞわびぬる

六三 たが里も訪ひもや来るとほととぎす心のかぎりまちぞわびにし

六一番歌は、遣水に映る影を見て憂き身の上を歎く孤独の歌である。六一番歌に重なるように、六二・六三番歌の独詠が続く。詞書から「久しくおとづれぬ人」は宣孝と思われ、実際の詠歌時期は宮仕え前と思われるが、ここでは、あえてこの場所に配置されたことを重視して考えたい。この二首に共通する心情は、誰も来なくなり、忘れられた我が身の寂寥と孤独である。六一番から六三番と続くこの孤独は何を示すのか。次に小少将の君の死を悼む歌群が現れる。

小少将の君の書きたまへりしうちとけ文の物

の中なるを見つけて、加賀の少納言のもとに

六四 暮れぬ間の身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつはかなしき

六五 たれか世にながらへて見む書きとめし跡は消えぬ形見なれども

返し

六六 亡き人をしのぶることもいつまでぞ今日のあはれは明日のわが身を

小少将の君は、宮仕えで友人の少ない紫式部にとって唯一うち解けられる特別な存在であった。親友の死は式部にとってまざれもない不幸であり孤独である。そして、我が身も同様に儚い命だという現実。前歌の孤独はこの友人の死と、それによる孤独を際立たせるための配列と考えられる。次には親友の死を惜しむように、生前の小少将の君との贈答が置かれる。

内裏に、水鶏の鳴くを、七八日の夕月夜に

小少将の君

六七 天の戸の月の通ひ路ささねどもいかなるかたにたく水鶏ぞ

返し

六八 横の戸もささでやすらふ月影に何をあかずとたく水鶏ぞ

この贈答は南波氏が「形は贈答だが、実はまさに仲のよい合唱のようにさえ思われる」と述べるように、非常に類似している。趣き深い夜に水鶏を題材にした小少将の君との風雅な贈答である。憂愁の共有から孤独、小少将の君の死、生前の語り合いと、陽明本ではB群全体で小少将の君への追慕を家集に刻んでいる。

その後に配された道長との贈答にはどのような意図が読み取れるのだろうか。

朝霧のをかしきほどに、御前の花ども色々に乱れたる中に、女郎花いと盛りに見ゆ。

をりしも、殿出でて御覧す。一枝折らせた

まひて、几帳のかみより、「これただに返す

な」とて、賜はせたり

六九 女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそしらゆれ

と書きつけたるを、いとく

七〇 白露はわきてもおかし女郎花心からにや色の染むらむ

陽明本で「をみなへし」の贈答がこの位置にあるのは、死を悼む沈鬱した歌群から七一番から回想される帰京歌群へ繋げ、調和させるためといえる。「をみなへし」の贈答では、式部が自己を「つゆのわきける身」と卑下するのに対し、道長は「こゝろからにやいろのそむらむ」という。要するに、露が花を分け隔てするのではなく、花は花自身の「心から」美しくなるという意で返している。この道長の返歌は「みずからをさだすぎた女といった意識で、引きこみがちになる」紫式部を、「折から」をつかんで、引き立て、はげましてやろうという意」をもつと述べる南波氏の解釈¹⁶⁾のとおり、道長の暖かい心遣いが示されているように読める。そのような歌の前後関係から、陽明本では現存の位置に配列されていると解釈できる。

次に、実践本の配列について述べていきたい。資料の配列表の

こせうしやうのきみ

72 あまのとの月のかよひぢさゝねどもいかなるかたにたくくひなぞ

返し

73 まきの戸もささでやすらふ月かげになにをあかずとたくゝあなぞ

夜ふけて戸をたゞきし人、つとめて

74 夜もすがらくひなよりけになくゝぞまきのとぐちにたゞきわびつる

かへし

75 たゞならじとばかりたゞくゝひなゆへあけてはいかにくやしからまし

あさきりのおかしきほどに、おまへのはなど

もいろくゝにみだれたる中に、をみなへしい

とさかりなるを、との御らんじて、ひとえだ

おらせせたまひて、きちやうのかみより、

「これ、たゞにかへすな」とてたまはせたり

76 をみなへしさかりのいろをみるからにつゆのわきける身こそしらるれ

とかきつけたるを、いとく

77 しらつゆはわきてもをかじをみなへしこゝろからにやいろのそむらむ

ひさしくをとづれぬ人をおもひいでたるおり

78 わするゝはうき世のつねとおもふにも身をやるかたのなきぞわびぬる

(四行空白)

返し

79 たがさともとひもやくるとほとゝぎすこゝろのかぎりまちぞわびにし

このように並べてみると、実践本は65番から69番までを法華三十講歌群とし、出仕したばかりの「我が身を憂し」とする心情を引きずりながら、いまだに慣れない華やかな宮仕えに鬱屈してい

とおり実践本では小少将の君の歌群が抜け、日記哥の一から五の三十講関係歌と、日記哥一五・一六も道長との贈答が並び、宮仕え関係歌でまとまっている。次に本文を挙げる。長くなるため適宜詞書を省略する。

つちみかどどのにて、三十講の五巻、五月五

日にあたれりしに

65 たへなりやけふはさ月のいつかとてつゝのまきのあへる御のりも

(詞書省略 紫式部)

66 かぎり火のかげもさはがぬいけ水にくちよすまむのりのひかりぞ

(詞書省略 小少将の君)

67 すめるいけのそこまでゝらすかぎりびのまばゆきまでもうきわが身かな

やうやう明けゆくほどに、渡殿に来て、局の

下より出ずる水を、高欄を押さえてしばし見

ゐたれば、空の景色、春秋の霞にも霧にも劣

らぬころほひなり。小少将のすみの格子をう

ち叩きたればをしおろし給へり。もろともに

おりゐて眺めあたり

68 影見てもうき我が涙落ちそひてかごとがましき滝の音かな

返し

69 ひとりゐて涙ぐみける水のおもにうきそはるらん影やいずれぞ

あかうなればいりぬ。長きねをつゝみて

70 なべて世のうきのなかるゝあやめぐさけふまでかゝるねはいかゞみる

かへし

71 なにごとゝあやめはわかでけふもなをたもとにあまるねこそたえせね

うちにくひなのなくを、七八日の夕づく世に、

る式部の姿を描く。そのような中でも、同じ憂愁を共有できる少将の君との贈答、主である道長との贈答を「あやめ」「くひな」「をみなへし」という季節の風物を類聚的に関わらせながら、70番から77番に置いている。また、「五月五日」と「あやめ」、夏の鳥「くひな」、秋の「をみなへし」と、時間の推移も整っている。そのため全体として宮仕え初期頃を描いた歌群と読みとることができる。

また陽明本では孤独を表していた78（六二・79（六三）番の宣孝との贈答歌は、実践本では宮仕え関係歌群から次の帰京歌へ回想する繋ぎの役割をもつて配列されている。79番の「ほととぎす」は閨怨歌としては多情な男の喩えとなるが、現世と冥土を往来する鳥として、故人を思い出させる旧懐に関わる意味でも使われる。『源氏物語』幻巻にその例がみられる。

何事につけても、忍びがたき御心弱きの、つゝましくて、過ぎにし事、いたうものたまひ出でぬに、待たれつる時鳥の、ほのかに鳴きたるも、「いかに知りてか」と、聞く人、たゞならず。

源なき人をしのぶる宵の村雨に濡れて来つる山ほととぎす
とて、いとゞ、空を眺め給ふ。大将、

夕時鳥きみにつてなむ故郷の花たち花はいまぞ盛りと

これは亡き紫の上を偲ぶ光源氏の思いをほととぎすに托した場面である。79番歌も宮仕え関係歌群の後に配列されることで、宣孝追慕の歌として帰京歌に繋ぐために配列されているとい

えよう。

以上、両本の配列を比較してきたように、B群では陽明本は少将の君への追慕を中心とした配列であり、実践本は主に宮仕えでのやり取りを中心とした配列であることが分かる。また、両本に共通した歌であっても、前後の歌との関わりからそれぞれがもつ歌の意味にも違いが出ることは留意したい。

五 宮仕え関係歌の異同 ―C群―

C群での配列の違いは、A群・B群同様に実践本では日記哥六から八、日記哥一〇・一一の五首が並ぶことによつて宮仕え関係歌群となっている。陽明本では、C群の前の一〇三番から一〇八番の生前の宣孝との贈答を受けて宣孝回想の構成になっている。陽明本の配列から確認したい。本文は次のとおりである。

月見るあした、いかに言ひたるにか

一〇八 よこめをもゆめといひしは誰なれや秋の月にもいかでかは見し

一〇九 なにばかり心づくしにながめねど見しにくれぬる秋の月影

相撲御覧する日、内裏わたりにて

一一〇 たづきなき旅の空なるすまひをば雨もよにとふ人もあらしな

返し

一一一 いどむ人あまた聞こゆるものもしきのすまひうしとは思ひ知るやは

雨降りて、その日御覧はとまりにけり。あい

なのおほやけごとどもや

初雪降りたる夕暮れに、人の

一二 恋しくてありふるほどの初雪は消えぬるかとぞうたがはれける

返し

一二三 ふればかくうさのみまさる世を知らで荒れたる庭に積る初雪

一〇九番は、C群の前の一〇三番から続く紫式部と宣孝の贈答歌群の最後にあたる。一〇三番から一〇九番までの歌群では「七夕」「しのめ」「月」という秋の歌語を共通して用いながら宣孝の心変わりをなじり、徐々に悲嘆と孤独が募つてゆく心の推移を表現する。かつて宣孝の夜離れによる孤独を詠んだ歌を、宣孝死後の家集後半に配列する時、寡婦となった現在の孤独と重ねられ、紫式部のより深い孤独と宣孝への追慕の念が添えられていると解釈できよう。

一一〇・一一一番は同僚女房との「相撲」の贈答である。この二首の解釈は諸説分かれている。竹内氏は「恋の雰囲気がある」として、「気の合つ同志の宮仕えの感想を詠み合った」もので、「この贈答歌や左注には遊びの気軽さがある」と述べている⁽¹¹⁾。南波氏も「雨夜のつれづの折の風雅な遊びの贈答」⁽¹²⁾と述べ、竹内氏と似たような解釈をしている。

これらに対し、伊藤氏は「競争相手の多い相撲人に式部ら宮仕え女房の侘びしさ・つらさを相撲人の姿に託しつつ確認するもの」⁽¹³⁾という。山本氏も「内裏生活の落ち着かない居心地の悪さを感じ」ているのであり、「作者の心は宮仕えから離れてしまっている」⁽¹⁴⁾とマイナス的な解釈をしている。

これら諸氏のどちらの解釈をも含めているのが次の原田氏の解釈である。

「雨もよに訪ふ人もあらしな」は、恋歌めかして相手の来訪を誘う体でありながら、その実、そうした修辭に隠れて、理解者を持たぬ宮中での孤独感を訴えようとしたもの⁽¹⁵⁾。

「あいなのおほやけごとどもや」と興ざめになつてしまった感想を漏らすような左注から考えると、やはりこの贈答はそこまで深刻なものではなく、相撲人という言葉によつて同僚女房と宮仕えの辛さを詠み合ったものと解釈するのが妥当であろう。

一二二・一二三番の贈答歌についても、同姓の友人とのやり取りと解釈する説と、宣孝とのやり取りと解釈する説がある。この二通りの解釈ができること自体に注目したい。詞書では贈答相手が「人」と第三者的な表現であるため、誰かを特定することはできない。本稿のはじめでも記したように、家集は編纂物であるため、配列時の取捨選択と配列によつて配列意図に繋がる。それはすでにB群で論じたとおり異なつた配列の中では、同じ歌でも解釈は異なってくるということである。

そのように考えると、宣孝回想の中にあるこの贈答歌は宣孝との詠とみることも可能である。その場合、廣田氏が「親密な夫との関係を対照させて孤独な晩年の悲哀を嘆じている」⁽¹⁶⁾末尾歌がより際だつてくるのは確かだろう。

しかし、ここでは配列の流れから前歌の贈答に引き続いて同僚女

房との贈答と読んでおく。恋歌めいた体でありながら憂き身を思い合った贈答と解釈できよう。

以上のように解釈の問題が多々あるが、現行の配列に従って解釈すると、陽明本のC群はその前に置かれた一〇三番からの宣孝との贈答を含めて、宣孝回想から同僚女房との贈答で孤独を表出する配列である。

次に実践本の配列をみていきたい。実践本は119番「なにばかり」(陽明本一〇九)の前に、次の五首が配列されている。

九月九日、きくのわたをうへの御かたよりた

まへるに

114 きくのつゆわかゆばかりにそでふれて花のあるじに千代はゆづらむ

しぐれする日、こ少将のきみ、さとより

115 くもまなくながむるそらもかきくらしにのぶるしぐれなるらむ

返し

116 ことはりのしぐれのそらはくもまあれどながむるそでかはく世もなき

里にいで、大なごんのきみ、ふみたまへるついでに

117 うきねせし水のうへのみこひしくてかものうはげにさへぞおとらぬ

返し

118 うちらはらふともなきころのねざめにはつがひしをしぞ夜はに恋いしき

この五首は陽明本では日記哥に採録され、家集自体にはないのである。

114 番は「菊の露」に寄せた倫子への長寿を祈る賀の歌、115・116

番は小少将の君との時雨を詠んだ贈答、117・118 番は、大納言の君との水鳥を詠んだ贈答である。114 番の詞書で「老のこい捨てたま

へ」とあることが、晩年に近いことを表している。

小少将の君や大納言の君との贈答では、涙がちに暮らす切なさや、宮仕えに順応してしまった我が身の憂さが詠まれている。119 番歌「なにばかり」は、陽明本では宣孝の浮気で自分が涙に暮れている悲嘆を詠んだものと解釈できたが、宮仕え関係歌の中にある実践本では晩年の孤独を詠んだものと解釈できる。その後、120・121 番の同僚との「相撲」の贈答、122・123 番の「初雪」の贈答が並び、晩年の宮仕え生活での身の憂さ、儚さを表出した配列となっている。

実践本のC群のはじめに陽明本にはない五首が置かれたのは、家集後半を通して出仕開始の頃から始まり、宮仕えに慣れ、晩年を迎えるという紫式部の実人生の再構築を意図したためと考えられる。

ここで、両本のA・B・C群の配列の特徴を振り返ると、陽明本は回想表現として歌を配列している傾向があり、実践本は宮仕え関係歌を中心に配列している傾向が見られる。

六 末尾歌の相違

陽明本と実践本の独自性を最も表すのは末尾歌が異なることである。陽明本の末尾歌からみていきたい。

初雪降りたる夕暮れに、人の

111 恋しくてありふるほどの初雪は消えぬかとぞうたがはれける

返し

113 ふればかくうさのみまさる世を知らで荒れたる庭に積る初雪

114 いづくとも身をやるかたの知らねばうしと見つもながらふるかな

一一四番歌は実践本には採録されていない。陽明本ではC群最後にある贈答歌の答歌のようにみえる。南波氏は一一四番歌の基底に伊勢の「惜しからぬ命なれども心にしまかせられねば憂き世にぞ住む」(『伊勢集』二〇六)などを挙げ、「もつと本質的な人の世のはかない姿・人生の実相に相対し、凝視しての心境の歌として並べているものと思われる。」とする。

一一四番歌は景物も詠まれていないため、前の贈答歌と同列に並ぶものではなく、さらに深い孤独を詠んだ別次元のものと解釈すべきであろう。内容は、身の置きどころもない世の中の辛さを知りながら、なお生きながらえている自己の姿を凝視するものである。過去を回想させ、宣孝や小少将の君の死を効果的に表現した配列の中で、一一四番歌は、近親者の死と対照的に生き長らえる自己の現実を表している。

実践本の末尾歌は、陽明本ではB群に配されていた小少将の君の死の歌群である。

こせうしやうのきみの、かきたまへりしうち

とけぶみの、ものゝ中なるを見つけて、かゞ

せうんごんのもとに

124 くれぬまの身をばおもはで人の世のあはれをしるぞかつはかなしき

125 たれか世にながらへてみむかきとめしあとはきえせぬかたみなれども

返し

126 なき人をしのぶることもいつまでぞけふのあはれはあすのわが身を

124・125 番は、小少将の君の生前の文から、命は限りあるものと捉えつつ、しかし「かきとめしあ」とすなわち言葉は形見として命を越えて残ることを改めて感じたという歌である。それに対し126 番は、亡き親友の形見をながめている我が身も、やがては消える儚い命であることを詠じている。親友の死を通して、人も我も皆同じ儚い命であり、それが「生者必滅」の世の習いであること示している。

このようにみると、陽明本と実践本では末尾歌の内容が対照的であることに気づく。「うしと見つもながらふるかな」という陽明本の末尾歌は生き残っている我が身、つまり「生」を詠んでいる。回想を繰り返す構成をとることで末尾歌に残された式部の孤独が集約されるのである。実践本の末尾歌は「けふのあはれはあすの我がみを」と、人と我が身の命の儚さ、つまり「死」を詠んでいる。宮仕え歌を中心に時間軸に沿わせ、命の儚さを思う晩年へと一代記的な配列である。

家集後半の配列の異同に特に注目することで、配列の終着点が「生」に向いている陽明本と「死」に向かう実践本という両本の配列意図の違いが明らかになった。一代記的な実践本に比べて、陽明本の配列意図は、近親者の追慕を中心に残された自らの孤独を表している点で非常に主観的であり、また残された者だからこそ味わう「生」への苦悩を表現している。紫式部主体で、より彼女の心情迫るような配列が成されている点では実践本よりも陽明

本の方が紫式部の心情を伝えている可能性があるといえよう。

七 おわりに

家集後半の配列を比較すると、陽明本は回想を繰り返す配列によって残された紫式部の孤独を表した構成であった。実践本は宮仕え関係歌に重点を置き、紫式部の一代記的な構成であった。後半の宮仕え関係歌以外の配列がほぼ一致することから、これまでも言われているように両本は同じ祖本から派生したものであり、また詞書と歌の密接な関係から家集の原形は自選であったと思われる。それがどの時点で配列が乱れたのか、誰によって整理編纂が行われたのかについては究明できるものではなく、原形の配列や、現存資料が自選か他撰かを厳密に明らかにすることは困難である。しかし、今回論じた配列の特徴と、はじめに結論だけ記した表現の特徴を併せて考えると、それぞれが自選・他撰のどちらの性格を有しているかは窺える。

つまり、主体的で古態を残した表現、紫式部の心情に迫る配列で構成された陽明本は自選的であるといえる。客観的で整えられた表現、一代記的構成な構成をもつ実践本は、陽明本よりも後人が改編した可能性を含み他撰的であるといえる。

整合性により実践本の方が本来的とされているが、それは他の私家集にもみられるように、家に残すために編まれた自選家集が、選集資料や貴顕への献上のために整えられたと考えることもできる。特に、実践本は定家直筆本を忠実に写した旨の奥書きを持つ定家本系の伝本である。紫式部を源氏物語作者としても、また歌

人としても高く評価し、勅撰集に携わる歌壇の中心であった俊成・定家付近で改編が行われた可能性は十分考えられよう。配列の異同の比較から以上のような両本の特徴を明らかにしたことで、陽明文庫本及び古本系本文の重要性を改めて見直すべきではないかと考える。

注

(1) 岡一男『源氏物語の基礎的研究』(東京堂 昭29)

(2) 参考にした配列についての諸氏の新たな解釈は次のものである。

① 南波浩『紫式部集全評釈』(笠間書院 昭58)

諸注を包括させた『紫式部集』の集大成で、実践女子大学本を基盤としつとも、古本系特有歌を一部取り込むなど、配列の改訂を行っている。

② 清水好子『紫式部』岩波新書(岩波書店 昭48)

清水氏は、家集前半には娘時代の「からりとした明るさ」があるとする。また、現存の配列によって「宣孝という存在がしだいに大きく息づいてくる様相」をみることでできると指摘する。

③ 木船重昭『紫式部集の解釈と論考』(笠間書院 昭56)

木船氏は家集後半の歌の排列について、「おのずから宣孝との思い出に連繫し転換していくように、排列構成されている」とし、「想起による排列構成方法」という撰者独自の撰集方法を指摘する。

④ 山本淳子『紫式部集論』(和泉書院 平17)

古本系に基づいて配列方法を論じている。家集を「家集内物語」として現実と切り離して捉えるところに特徴がある。「物語的方法」を、読者の読みの可能性を広げるための方法とし、読者

重視の傾向が強い。

⑤ 原田敦子『紫式部日記 紫式部集論考』(笠間書院 平18)

原田氏は、家集構成について冒頭と末尾の照応から「入れ子型構成」を指摘する。また、宣孝との忘れがたい思い出を家集に残そうということで家集編纂が意図されたとして、その中で、前半と後半の成立時期は異なるという二段階成立論を述べている。

⑥ 田中新一『新注和歌文学叢書2 紫式部新注』(青蘭舎 平20)

田中氏は実践本を二元的四季観による式部自選であり、かつ原則的に年代順配列と結論付けている。しかし、これまで宣孝への関念歌と解釈されてきた後半の歌群を「創作物語的習作歌」という新たな解釈を試みている。

(3) 徳原茂実『紫式部集』自撰説を疑う(『武庫川国文』武庫川女子大学国文学会 平19・11)

廣田収『陽明文庫本『紫式部集』解題』(久保田孝夫他『紫式部集大成』(笠間書院 平20)の第三部)

(4) 陽明文庫本を底本とし、配列を改めている注釈書の次のとおりである。

・新日本古典文学大系『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』(岩波書店 平1)

・新潮日本古典集成『紫式部集・紫式部日記』(新潮社 昭55)

(5) 南波浩『紫式部集の研究 校異篇伝本研究篇』(笠間書院 昭47)

(6) (2) (5)と同じ。

(7) (2) (4)と同じ。

(8) (2) (1)と同じ。

(9) (2) (1)と同じ。

(10) (2) (1)と同じ。

(11) 竹内美千代『紫式部集評釈 改訂版』(桜楓社 昭51)

(12) (2) (1)と同じ。

(13) 伊藤博『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』新日本古典文学大系(岩波書店 平1)

(14) (2) (4)と同じ。

(15) (2) (5)と同じ。

(16) 廣田収『紫式部集』における和歌の配列と編纂 ―冒頭歌と末尾歌の照応をめぐって―(『人文学』同志社大学人文学会 平17・12)

(17) (2) (1)と同じ。

『紫式部集』対照表

※50番までは陽明本・実践本共に配列は一致している。(一)内に詠者を記した。特定できないものは「※」の後に想定される人物を記した。
51番から歌番号は古本系は漢数字、定家本系は算用数字を用いた。陽明文庫本「日記哥」は「日一」のように記し、現存『紫式部日記』
収載歌は「現日1」のように記した。定家本系の歌番号の下には、それに対応している古本系の歌番号を記してある。

1	めぐりあひて	(式部)	26	小塩山	(※侍女か)
2	鳴きよはる	(式部)	27	ふるさとに	(式部)
3	露しげき	(式部)	28	春なれど	(式部)
4	おぼつかた	(式部)	29	みづうみに	(式部)
5	いづれぞと	(方違へにわたりたる人 ※宣孝か)	30	よもの海に	(式部)
6	西の海を	(筑紫へ行く人のむすめ)	31	くれなゐの	(式部)
7	西へ行く	(式部)	32	閑ぢたり	(式部)
8	露ふかく	(思ひわづらふ人)	33	東風に	(宣孝)
9	あらし吹く	(式部)	34	言ひ絶えば	(式部)
10	もみぢ葉を	(思ひわづらふ人)	35	たげからぬ	(宣孝)
11	霜こほり	(式部)	36	折りて見ば	(式部)
12	ゆかつとも	(物思ひわづらふ人)	37	ももといふ	(宣孝)
13	ほととぎす	(式部)	38	花といはば	(式部)
14	はらへどの	(式部)	39	いづかたの	(式部)
15	北へ行く	(式部)	40	雲の上の	(人 ※友人か)
16	行きめぐり	(西の海の人)	41	なにかこの	(式部)
17	難波渦	(西の海の人)	42	夕霧に	(継娘)
18	あひみむと	(式部)	43	散る花を	(式部)
19	行きめぐり	(西の海の人)	44	亡き人に	(式部)
20	三尾の海に	(式部)	45	ことわりや	(※侍女か)
21	磯がくれ	(式部)	46	春の夜の	(式部)
22	かきくもり	(式部)	47	さを鹿の	(式部)
23	知りぬらむ	(式部)	48	見し人の	(式部)
24	おいづ島	(式部)	49	世とともに	(男)
25	ここにかく	(式部)	50	かへりては	(式部)

◎古本系(陽明文庫本)

五一 たが里の (式部)

(欠歌)

五二 をりからを (式部)

五三 消えぬまの (式部)

五四 若竹の (式部)

五五 数ならぬ (式部)

五六 心だに (式部)

五七 うきことを (弁のおもと)

(欠歌)

五八 わりなしや (式部)

五九 しのびつる (同僚女房)

六〇 今日はかく (式部)

六一 影見ても (式部)

六二 忘るは (式部)

(欠歌)

六三 たが里も (式部)

六四 暮れぬ間の (式部)

六五 たれか世に (式部)

六六 亡き人を (加賀少将)

六七 天の戸の (小少将君)

六八 槇の戸も (式部)

六九 女郎花 (式部) [現日1]
七〇 白露は (道長) [現日2]

◎定家本系(実践女子大学本)

51 (五一) たがさとの (式部)

52 (五三) きえぬまの (式部)

53 (五四) わか竹の (式部)

54 (五五) かずならぬ (式部)

55 (五六) にほひだに (式部)

56 (五七) 身のうさは (式部)

57 (五八) とちたりし (式部)

58 (五九) み山辺の (同僚女房)

59 (六〇) うきことを (弁のおもと)

60 (六一) つれづれと (式部)

61 (六二) わりなしや (式部)

62 (六三) しのびつる (同僚女房)

63 (六四) けふはかく (式部)

64 (六五) たへなりや (式部)

65 (六六) かざり火の (式部)

66 (六七) すめるいけの (大納言の君)

67 (六八) かげみても (式部)

68 (六九) ひとりゐて (小少将の君)

69 (七〇) なべて世の (小少将の君)

70 (七一) なにごとと (式部)

71 (七二) あまのとの (小少将の君)

72 (七三) まきの戸も (式部)

73 (七四) 夜もすがら (道長)

74 (七五) たゞならじ (式部)

75 (七六) をみなへし (式部)

76 (七七) しらつゆは (道長)

77 (七八) 忘るゝは (式部)

78 (七九) たがさとも (式部)

79 (八〇) (四行空白)

初出仕

七一 ましもなほ (式部)
七二 名に高き (式部)
七三 心あてに (式部)
七四 けちかくて (宣孝)
七五 へだてじと (式部)
七六 峰寒み (宣孝)
七七 めづらしき (式部)
七八 曇りなく (式部)
七九 いかにいが (式部)
八〇 あしたづの (道長)
八一 おりおり (人 ※宣孝か)
八二 霜枯れの (式部)
八三 入るかたは (式部)
八四 さして行く (人 ※宣孝か)
八五 おほかたの (式部)
八六 垣ほ荒れ (式部)
八七 花すすき (式部)
八八 夜にふるに (式部)
八九 心ゆく (式部)
九〇 おほかりし (式部)
九一 身のうさは (式部)
九二 閉ぢたりし (式部)
九三 みやまべの (同僚女房)
九四 みよしのは (式部)
九五 三笠山 (中将の君)
九六 さしこえて (式部)
九七 むれ木の (式部)
九八 九重に (式部)
九九 神代には (式部)
一〇〇 あらためて (式部)
一〇一 めづらしと (式部)
一〇二 さらば君 (弁のおもと)
一〇三 うちしのび (人 ※宣孝か)
一〇四 しのめの (式部)
一〇五 おほかたに (式部)
一〇六 天の川 (人 ※宣孝か)
一〇七 なほざりの (式部)
一〇八 よこめをも (式部)

初出仕

113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101 100
(二〇八) (二〇七) (二〇六) (二〇五) (二〇四) (二〇三) (二〇二) (二〇一) (二〇〇) (九八) (九七) (九六) (九五)
よこめをも あまの河 おほかたに うちしのび さらばきみ めづらしと あらためて 神世には こゝのへに むれ木の さしこえて みかさ山
(式部) (人 ※宣孝か) (式部) (人 ※宣孝か) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部)

99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80
(九〇) (八九) (八八) (八七) (八六) (八五) (八四) (八三) (八二) (八一) (八〇) (七九) (七八) (七七) (七六) (七五) (七四) (七三) (七二)
おほかりし ころゆく 世にふるに はなすすき かきほあれ おほかたの さしてつく いるかたは しもがれの おりくづの あしたづの いかにいが くもりなく めづらしき みねさむみ へだてじと けちかくて こゝろあてに 名にたかき ましもなほ
(式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部)

日記哥
日一 妙なりや (式部)
日二 かがり火の (式部)
日三 澄める池の (大納言の君)
日四 なべて世の (小少将の君)
日五 菊の露 (式部)
日六 水鳥を (式部)
日七 雲間なく (式部)
日八 ことわりの (小少将)
日九 うきねせし (式部)
日一〇 うちねせし (式部)
日一一 うちねせし (式部)
日一二 年暮れて (大納言の君)
日一三 すきものと (式部)
日一四 人にまだ (式部)
日一五 夜もすがら (道長)
日一六 ただならじ (式部)
日一七 世の中を (式部)

C群

小少将の死

126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114
(六六) (六五) (六四) (六三) (六二) (六一) (六〇) (五九) (五八) (五七) (五六) (五五) (五四)
なき人を くれぬまの たれか世に くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの くれぬまの
(式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部) (式部)